

花王教員フェローシップ「コククジラの回遊調査」報告書

報告者 佐藤幸代（奈良県 田原本町立田原本中学校教諭）

調査日 2005年8月16日～21日

1 調査地の生活環境と自然環境（バンクーバー島北部）

バンクーバー島北部の港町「ポートハーディ」からスピードボートでさらに3時間ほど行ったところにある無人島が今回の調査の基地だった。

手付かずのカナダの自然の中に、人間が住める最小限の設備を手作りでこしらえたその基地はチームリーダー「ウイリアム」を中心に、世界中からクジラの調査のために集まってきたスタッフたちで運営されている。電気も水道もなく、トイレに屋根もドアも壁もない。当然シャワーを浴びることもできないし、夜の移動は真っ暗やみのなかを懐中電灯の心細い明かりでかろうじて可能となる。

そんな人間が本来住むべきところではないのかもしれない場所は、クジラをはじめとする多くの海洋哺乳類や海鳥たちの聖域だった。シーカヤックで少し進めばたくさんの海鳥のコロニーやアザラシがのんびりくつろいでいる様子を目にすることができる。

また山に分け入れれば、日本では決して立ち入ることのできない手付かずの湿原が広がり、ピンクやグリーンの美しいのコケの絨毯を見ることができる。運がよければ海水温調査で海に繰り出せばシーカヤックの上からもクジラの潮吹きを間近で眺めることもできる、そんな貴重な環境の中、今回の調査に参加できたことは大変幸運であった。

2 調査の概要

ボランティアメンバーはカナダ、アメリカ、ロシア、メキシコ、アフリカ（トゴ）そして日本からの2人。大きく2つのグループに分け、Aグループはボートに乗って1泊2日のクジラ調査、Bグループはシーカヤックを使つての海水温調査と蛙の調査をすることになった。

私と富山先生とカナダ人のナディアはBグループ。まずはシーカヤックの練習から始まった。美しい入り江でのシーカヤックは心なごむ時間だった。しかし、これは調査、遊びではない。一通り乗れるようになれば、ヘルメットと網を持って別の島まで漕ぐ。

小川の周りに生息する「カエル」の調査に行くのだ。かなりの距離をこいで着いた島も当然人は一人も住んでいない。ヘルメットをかぶり、道なき道を踏み分けてカエルを探す。カエルが見つければ写真を撮って同定する。クジラの調査だけではなく、周辺の環境調査も同時に行うということなのだろう。

私は一匹も発見することができないどころか、歩いて付いていくのが精一杯であった。

しかし、富山先生は小さいころからカエルを捕まえて遊んでいたとのことだけあって、他のスタッフも感心するほど、見事にカエルを見つけては捕まえていく。



スタッフは発見場所の緯度と経度を測定し、メモしていく。

半日の調査で5, 6匹のカエルを見つけ（ほとんど富山先生のおかげ）無事に調査を終了した。午後は同じくシーカヤックに乗り、海水温の測定や海底の写真を撮りに行く。これもかなりの距離を漕いで3箇所くらいの水温を計る。海底の写真は水中カメラを底に沈めて撮るのだが、2艘のカヌーを横づけにしてカメラを取り出したりするのはなかなか大変であった。波があると思うように進まず、かなり体力を必要とした。しかし、今年来るはずの「コクジラ」が今年は一頭も回遊してきていないというのは海水温の上昇なども関係しているのかもしれない。こんな地道な作業を繰り返しているスタッフたちに頭の下がる思いであった。翌日もほぼ同じ作業の繰り返しで、正直「クジラの調査に来たはずなのになぜカエルを探しているんだろう」とカナダ人のナディアと笑ったものだった。

しかし、翌日からのクジラの調査でそんな気持ちも吹き飛んだ。

3日目、クジラの調査に行っていたAチームが帰ってきた。この日は日本から持ち込んだ食材を使って、富山先生と日本食を作り、スタッフ、ボランティアメンバーに食べてもらった。味噌汁と肉のない「肉じゃが」ジャパニーズピザ（お好み焼き）。前日から「YUKI、明日はジャパニーズディナーを作ってくれるのか？」とたくさんスタッフに声をかけられ、あまりの期待の大きさに少々緊張した。日本食は海外でもかなり人気があるようだ。しかし心配をよそに富山先生のすばらしいサポートにも助けられ、おいしく仕上がった。豆腐は食べられないというメンバーもいたが、肉じゃがは汁も全て売り切れるほど好評であった。しかし、一番喜んだのは久しぶりに味噌汁を食べた私たち日本人だった。ネイティブの会話になかなかついていけず、苦勞していた私たちだったが、この日を境にぐんと仲間との距離が縮まった気がした。

4日目、いよいよ私たちのグループがクジラの調査に出かける。久しぶりにシャワーを浴びられることも楽しみの一つだった。寝袋と一泊の荷物を抱えて出発。

しかしボートの上は寒い。かなり着込んでも身体の心から冷えてくる。クジラの調査も楽ではない。この日は結局一頭のクジラにも会えなかった。「クジラを調査に来たのに、カエルを数匹見ました、ではシャレにならないよね。」とナディアと苦笑い。

晩はポートハーディの港に停泊するらしい。久しぶりに文明のあるところに戻ってきて、

いささか元気が出てきた。おいしいピザを食べてボートの中で寝る。

翌朝待ちに待ったシャワー。港の猟師たちの利用する店には簡易シャワーが設置されている。久しぶりに浴びるシャワーで生き返った気分だった。

天気も上々。今日こそクジラを見つけるぞ。

調査を始めて1時間後くらいだったろうか。家族で参加していたアメリカ人のハービックさんがザトウクジラのジャンプを発見。ボートを寄せる。母クジラとコクジラだった。

母クジラは魚を食べるのに夢中、コクジラは母親の脇で楽しそうに遊んでいる。母クジラは魚を食べるために何度も顔を出したり、ジャンプしたり、スパイホップ（顔を出して様子を伺う動作）をしたりと活動意欲旺盛であった。驚いたのはいずれも岸にほど近いところで、近くではカヌーで遊んでいる人もいるようなところでクジラが出ることだった。

ボートの真横で捕食のシーンが見られたのは大迫力だった。これも調査船だからできることでホエールウォッチングの船ではこんなに近づくことはできないだろう。クジラのシッポで同定するため、みんな必死で写真を撮る。ひとしきり撮れば次のポイントに移動する。



捕食で顔を出した母クジラ



ヒレを出して遊んでいる

(望遠レンズもないコンパクトデジカメでも撮影できるほど近い)

この日はザトウクジラのほかにオルカ（シャチ）の群れも長時間にわたって観察することができた。またイシイルカ、ミンククジラにも出会った。最終日もたくさんのザトウクジラを観察することができた。



迫力満点のシャチ

夜にはウイリアムの講義があった。

クジラの回遊のメカニズム、どのあたりを回遊しているのか、など。日本の近海にもたくさんクジラが回遊しており、ウイリアムは日本のクジラにも大いに興味をもっているようであった。

われわれ人間のように国境もなく、大海原を自由に回遊するクジラたち。彼らは人間の営みをどのように感じているのだろうか。



講義をするウイリアム

3 体験で学んだこと、学校教育でどのように生かすか

今回の体験でまず感じたことは「動物、生物の観察がいかに地道で大変な作業であるか」ということだった。来る日も来る日も同じ作業を繰り返しながらどろどろになって作業する。凍えるような寒さの中、ひたすらクジラを探す。たった6日間の作業でもクタクタになってしまった自分と、その生活環境の中で何ヶ月も滞在して調査を続けるスタッフを比べたとき、あまりの精神力の違いにただ頭が下がるばかりであった。

環境保護、生物保護と口で言うのはたやすいが、そのためにどれだけの忍耐と労力と知識、そして生物への深い愛情が必要なのか、を感じる事ができたことが今回の一番の収穫であったと思う。ウイリアムが自分の肩についた「蜘蛛」をやさしく拾い上げ、木に戻してやったときの優しいまなざしを忘れることができない。こんな彼だからこそ、この過酷な状況の中でも楽しみながら調査を続けることができるのだろう。

また、英語力の必要性についても痛感した。ネイティブの会話のスピードについていくだけの英語力を日本にいながら身につけるのは至難の業だとは思いますが、「もう少し話せたら」と思うことはしばしばであった。毎日少しずつでも英語の学習をしたいと痛切に感じている。しかしそれと同時に、言葉は通じなくても同じ感動を共有することで心が通い合う、ということを知った。「自然のすばらしさ、クジラの偉大さ」それだけで、言葉を超越し、感動を共有することができた。きっと二度と同じメンバーで出逢うことはできないだろうけれど、この体験は彼らとの温かい思い出と共に私の心に残るであろう。

「感動が人を動かす」。環境教育でも「守りたいと思う美しい自然」を知らなければ行動に移すことはできないだろう。感動したらそれを守るためにどうしたらよいか「知る」そして「行動する」そんな風に広がっていくはずだ。今回の体験を通してこのことを確信した。これから勤務校では沖縄の自然体験学習のプログラムを組むことになるが、この体験を生かして、心で感じる自然体験を取り入れていきたいと考えている。また、世界中に仲間を作るためにも英語力を磨くことの必要性、未知なる世界に飛び込む楽しさ、そんなことも生徒たちに伝えていきたい。

「世界はすばらしい、地球は一つの生命体」、大げさに聞こえるかもしれないが私が今回の体験で感じた実感である。この美しい星に住む全ての生物が共存できる環境を守るために自分ができる小さなことから始めていきたい。



お世話になった、北海道の富山先生、
調査のリーダーウィリアム、
同じグループのカナダ人、ナディアとともに



最後によく撮れた渾身の一枚！

最後になりましたが、このようなすばらしい機会を与えてくださった、花王教員フェロシップの皆様から心から感謝申し上げます。

2005. 9. 19